

N. シパーノフの越境する私立探偵： ソヴィエト文学におけるその可能性の条件

坂中紀夫

はじめに

「ソヴィエト政治・探偵小説の草分けの一人」と評されるロマン・キム（1899-1967）は、¹江戸川乱歩との往復書簡で、自身の創作ジャンルについて、次のように述べている。「ロシア警察の探偵は、革命家、良心的なインテリ労働者全体に敵対する行動をとっていた」という「全く政治的な理由」から、「ロシアでは探偵小説のジャンルは十九および二十世紀（革命前）には発達し」なかったと。²

しかし、近年の研究を踏まえるなら、この認識には不正確なところがある。例えば、A. レイトブラートは「一定の条件を付すなら、1872年をロシア探偵小説の正確な『誕生』の日付と呼ぶことができる」と書いている。³これは、A. シクリャレフスキー（1837-1883）らの作品の登場を指して述べられたものだ。久野康彦は、そのシクリャレフスキーの作品について、「英米の古典的な探偵小説とは別の創作原理が働いて」おり、その原理の一つとして犯罪心理の問題を挙げ、ナット・ピンカートン物といった外国の私立探偵の活躍を描いた20世紀初頭の「分冊シリーズ探偵小説」についても、「基本的に前面に出てくるのは追跡、格闘といったアクションの要素である」と論じている。⁴ レイトブラートは20世紀初頭のこうした状況を、「国産のこのジャンルの本は、冒険的な散文（論理的な思考力よりも、行為のダイナミズムや主人公の活力が重視される）に近づくか、社会心理小説（関心の基礎は、犯罪の理由や犯罪者の心理にある）へと転化した」とまとめている。⁵ しながら、M. チェルニャークによれば、1930年ごろには、社会主義リアリズムの影響で、「大衆文学というジャンル（アヴァンチュール小説、探検小説、探偵小説、ファンタスチ

¹ Сорокина М.С. Жизнь, похожая на коробку спичек // Природа. 2006. № 4. С. 92.

² 江戸川乱歩「探偵小説の世界的交歓：チェーホフの長篇探偵（？）小説」『宝石』1956年10月号、72頁。キムの手紙の翻訳は原卓也。

³ Рейтблат, А.Е. Детективная литература и русский читатель (вторая половина XIX – начало XX века) // От Бовы к Бальмонту и другие работы по исторической социологии русской литературы. М., 2009. С. 298.

⁴ 久野康彦「革命前のロシアにおける探偵小説の歴史から：「ロシアのガポリオ」 A.シクリャレフスキーと20世紀初頭の「分冊シリーズ探偵小説」」『ロシア語ロシア文学研究』第33号、2001年、106、107頁。

⁵ Рейтблат, Детективная литература. С. 305-306.

カ、メロドラマなど)は、ブルジョア的と宣告されてしまう」。⁶ つまり、帝政期、あるいは革命前後にも冒険・心理小説などの形で探偵小説に類する作品は存在していたのだ。

だが、キムが「探偵小説」という言葉で意味していたのは、上記のような作品とは恐らく異なる。彼は1947年に「アメリカにおける探偵小説」という題で報告を行い、⁷ そこで「悪名高いピンカートン物、すなわち紙くず同然の三文小説」という言葉を述べ、⁸ それとは対照的に两大戦間期の主にイギリスのミステリ作家について好意的に論じた。つまりキムは、謎解きゲームのような古典的作品をこそ探偵小説として評価していたのだ。

では、そう語るキム自身はどのような作品を書いていたのか。職業的ではないものの、探偵役が登場し、事件の解決に取り組むというプロットが明確な作品に、「特務機関員」(1956)と「誰がブンナカンをさらったか？」(1963)という二つの中編がある。⁹ 前者はある大富豪の密室殺人を、後者はブンナカンなるタイ人の拉致事件を扱ったものなのだが、これらの作品には、特徴的な共通点が二つある。

一つ目は、犯罪めいた出来事が発生する場所として、ソヴィエト・ロシアが選ばれないということだ。密室殺人の舞台となるのは香港であり、拉致事件のそれはアメリカの大都市である。同じことは、キムのこれ以外の多くの作品についても指摘できることなのだが、それは、犯罪の発生地として作者が意図的にこの場所を除外した、ということの意味している。

二つ目は、いずれの作品においても、探偵役が事件の解決に本質的な形では貢献しないということだ。物語の結末で、密室殺人も誘拐も狂言だったことが明かされ、その解決を目指していた探偵役が端から不要だったことが、読者に知らされる。探偵や推理小説に対するこのようなアイロニカルな態度が顕著なのが、シャーロック・ホームズの殺人を描いた「名探偵殺人事件」(1966)である。¹⁰ しかし、この世界一の探偵は作中で行動する人物としては現れない。主人公はコナン・ドイルで、彼がアメリカの出版社から、ホームズはすでに公的なキャラクターなので、著者の意向とは関係なく新たなシリーズを出版するつもりである、と告げる手紙を受け取るのだ。それを聞いたドイルは、「これこそシャーロック・ホームズの本当の殺害じゃないか。オリジナルの、現実における」¹¹ と憤る。つまり、

⁶ Черняк, М.А. Массовая литература XX века: учебное пособие. М., 2007. С. 130.

⁷ Ким Р.Н. Детективная литература в Америке // Просветов И.В. «Крестный отец» Штирлица. М., 2015. С. 268-282.

⁸ Там же. С. 269.

⁹ Ким Р.Н. Агент особого назначения. М., 2003.; Ким Р.Н. Кто украл Пуннакана? // Ким Р.Н. Школа призраков. Кто украл Пуннакана? Кобра под подушкой. Тетрадь, найденная в Сунчоне. М., 1971. С. 107-197.

¹⁰ Ким Р.Н. Дело об убийстве великого сыщика // Ким Р.Н. Тайна ультиматума: повести и рассказы. М., 1969. С. 5-42.

¹¹ Там же. С. 42.

「ホームズの殺人」とは、出版市場における犯罪的な謎の拙劣な増殖がもたらす、一つのコンテンツの現実的な消滅を意味していたのである。これは、推理小説を書くということ自体が、その象徴的な人物の死につながってしまうという、創作そのものに対するアイロニカルなメッセージになっている。¹²

しかし、このような視座は、キム個人の作家的資質に大きく由来するものであると同時に、歴史的・社会的な影響を受けたものでもあった。R. スタイツは、ロシアにおいて「探偵小説、冒険小説、そしてSFといった大衆的なジャンルは1950年代に蘇りを見せ、広く中間的な領域を占めること」となったと指摘している。¹³ なぜこの時期だったのか。大局的な観点からは、「三〇年代および四〇年代は、建設の年間、次いで戦争及び国家の再建の年間であって、このジャンル〔推理小説〕への読者の関心の積極化を助成しなかった」ためと説明される。¹⁴ しかし、50年代の転換期以降も、探偵小説はイデオロギー的に問題視されるジャンルだった。これに関して、黒田辰男は次のように述べている。

探偵を主人公として社会の暗黒面を描き出すということは、こういう暗黒面の摘発を好まなかったツァーの権力の下でも、また社会発展の明るい方面を強調して青少年を育成してゆこうという使命をもったソヴェト文学においても、そのよき土壌が見出せなかったとも見られよう。¹⁵

では、50年代に蘇ったとされる犯罪を巡るジャンル小説の内容とは、どのようなものだったのか。深見弾はこう指摘する。

社会主義経済の構造上、私企業が原則として存在しないわけですから個人的営業の私立探偵が成り立つ基盤がありません（需要はあるような気がします）。しかし理由はそれだけではなさそうです。探偵という警察活動に極めて近い行動をする部分を必要とする職業が、警察権力が国家に集中しているような社会制度の国では、権力機構の枠の外にあるため危険な存在になる恐れがあるからではないでしょうか。

だから社会主義諸国で Detective Story と言えば、即、警察小説だと言うことになります。¹⁶

¹² 詳しくは次を参照。Norio Sakanaka, “Roman Nikolayevich Kim and The Strange Plots of His Mystery Novellas” in Călin-Andrei Mihăilescu and Takayuki Yokota-Murakami eds., *Policing Literary Theory* (Leiden, Netherlands: Brill, 2018), pp. 149-165.

¹³ Richard Stites, *Russian Popular Culture: Entertainment and Society Since 1900* (New York: Cambridge University Press, 1992), p. 128.

¹⁴ イリーナ・ボガートコ「ソヴェートの推理小説：最近年間の作品の概観」『季刊ソヴェート文学』1974年夏季号（48号）、236頁。

¹⁵ 黒田辰男「ソヴィエトの推理・科学小説：善人・英雄など肯定的人物を描く」『日本読書新聞』1960年11月28日6面。

¹⁶ 深見弾「ソ連と東欧の警察小説」『ミステリマガジン』1976年11月号、144頁。

要するに、この時期にロシアで一定の支持を得るようになった、犯罪に特化した大衆文学とは、警察小説（民警小説）のことを指していたのだ。実に、多くの冒険小説を残したニコライ・トマン（1911-1974）も、「刑事事件をテーマに作品を書くときに覚えておかなければならない」こととして、「我らが民警の捜査員が主人公でなければならないということ」を強調している。¹⁷ また、民警小説の代表的作家アルカージョー・アダモフ（1920-1991）も、「現実の捜査においては、いかなる犯罪も、たとえ最も才能のある人物であっても一人の人間の活躍で解決されるものではなく、「それは常に全集団による複雑でときに危険な営み」であると述べ、組織的な行動を重視するトマンと同様の見解を表明している。¹⁸ こうした見解に立てば、キムが諸作品の主人公を外国人に、その舞台をロシアからは遠く離れた場所に設定したことも、私立探偵の存在を否定するこの一種の文芸規範の働きを一時的に無力化させる方策だったと見做すことができるだろう。

しかし、ここに一人の例外的な作家がいる。袋一平が「ソ連のシャーロック・ホームズを創造するという意欲で探偵小説を書いている人」と評したニコライ・シパーノフ（1896-1961）である。¹⁹ 彼の作品には、ニール・クルチーニンというソ連市民の私立探偵が登場し、一定の知名度を持ったということに関しては、恐らく最初の一人となった。さらに、クルチーニンにはスレン・グラチークなるアルメニア人のワトスン役も付いており、この人物が一人称の語り手になる（初出時）という点でもホームズ物と似通っている。

しかし、シパーノフは、同じく私立探偵を描くことを目指した同時代の作家キムがそうしたように、「外国人を探偵役にする（民警員でなくてもよい）」という方策を取らなかった。つまり、トマンらの言う「民警の捜査員が主人公」という文芸規範を無化できていない。そのため、彼のクルチーニンは、厳しい批判に曝されてしまう。その急先鋒となったのが、先にも引用したアダモフである。ホームズでさえ『『大衆』から高く引き上げられた『超人』として描かれている』ためにブルジョア的だとするアダモフは、クルチーニンに対してはさらに手厳しい。

ソヴィエトの作家がこの「[ホームズという] 処方箋」に倣うと、まずいことになります。まさにそのような結果となってしまったのが、例えばN. シパーノフの『ニール・クルチーニンの冒険』と『魔法使いの弟子』の二作です。作者は自分の主人公に、理解しがたい特殊な例外性を与えようとしています。主人公たちに超自然的な資質を具えさせたことで、N. シパーノフ

¹⁷ Литвинов В., Стариков Д. О жанре или о теме // Литературная газета. 12. 07. 1958.

¹⁸ Адамов А. «Детектив» и правда жизни // Литературная газета. 01. 07. 1958.

¹⁹ 袋一平「ソ連の探偵小説界近況」日本推理作家協会（編集）『探偵作家クラブ会報：101号 - 145号』柏書房，1991年，155頁。

は何にもまして生活の真実から退行してしまっているのです [...]。²⁰

ここでアダモフが挙げている二冊には、後に見るクルチャーニン・シリーズの全作品が収められている。つまり彼は、このシリーズ全体が失敗作だと酷評しているのだ。一方で、シパーノフ自身、1945年にこの連作を書き始めるも、1949年には早々にクルチャーニンの引退を描き、その幕を閉じようとする。ここには、文壇からもそのヒーロー像を「生活の真実」に基づかないとして否定されるクルチャーニンに対する、作者自身の不満もあったのかもしれない。

いずれにせよ、我々の関心は、「ソ連のホームズ」を創造するというシパーノフの困難な構想と、彼がいかにしてそれを実現させたかにある。構想の困難さとは、「私立探偵が成り立つ基盤」の非現実性と、「社会の暗黒面を描き出す」ことに対する風当たりを意味している。

ここで注目されるのが、クルチャーニン・シリーズに共通するある設定、すなわち主人公らが第二次大戦後のロシアの周辺国を旅行しているという設定である。繰り返される「越境する探偵」という設定と、私立探偵の成立とに関連性はあるのだろうか。そうだとすれば、なぜ越境は私立探偵に可能性をもたらすのか。まずは、クルチャーニン・シリーズの内容の具体的な検討から始めよう。

1. 越境する探偵

雑誌に発表されたクルチャーニン・シリーズの当初のタイトルは、「クルチャーニンの冒険 Похождения Кручинина」(1945)「三の秘密 Тайна трех」(1945)「黄色い手袋 Желтые перчатки」(1946)だったが、²¹『真理の探究者 Искатель истины』(1955)というタイトルで書籍化される際に、²² それぞれ「大晦日 В новогоднюю ночь」「オレ・アンセン事件 Дело Оле Ансена」「ニール・クルチャーニンの個人的幸福 Личное счастье Нила Кручинина」と改題され、叙述形式も、グラチークの一人称から三人称に変更されている。

クルチャーニンの経歴は以下のようなものだ。彼はヤルタで生まれ、幼少時より絵画の才能を見せていた。しかし、ギムナジウムに通っていたところに孤児となり、寮に入ることができる、つまりある程度、生活を保障されるという理由から、美術を学ぶ代わりに、法学

²⁰ Адамов. «Детектив» и правда жизни.

²¹ Шпанов Н. Похождения Кручинина // Красноармеец. 1945. № 11-12. С. 28-31.; № 13. С. 22-24.; № 14. С. 22-24.; № 15-16. С. 29-32.; Шпанов Н. Тайна трех // Огонёк. 1945. № 34. С. 5-6, 14.; № 35. С. 9-10.; № 36. С. 12-14.; № 37. С. 13-14.; № 38. С. 8-10.; Шпанов Н. Желтые перчатки // Красноармеец. 1946. № 1. С. 20-22.; № 2. С. 21-23.; № 3-4. С. 28-30.; № 5-6. С. 29-31.; № 7-8. С. 29-31.

²² Шпанов Н. Искатели истины. М., 1955. この三作品については次の文献から引用し、カッコ内に頁数を示す。Шпанов Н.Н. Первый удар. М., 2008.

部に進学する。この大学卒業と、ロシア革命の到来とが同時期とされている。卒業後の彼は、理論と実践の二つの世界を往復する。最初は弁護士として主に学問的問題に取り組み、次に予審判事へと転身し、犯罪捜査の現実を知る事となる。そうかと思えば、今度は犯罪研究所の研究員となり、その科学技術を習得する。そして、それを経て再度、捜査員に復帰する。一連の彼の経歴は、「予審判事と犯罪学者・捜査員[といういわば司法と行政の]の機能と技術を一人の人間に一元化することを目的にしていたのだ」(193)。このように、実のところクルチーニンも、若い頃は民警から独立して犯罪と対峙していたわけではない。その彼が私立探偵的な性格を帯びるようになったのは、第二次大戦後に犯罪学の知識を買われ、様々な国から講演の招待を受けるようになって以降のことだったようだ。そして、こうした活動には、「モスクワ」からの奨励もあったらしい。²³ その結果、クルチーニンは諸外国を歴訪し、旅先で遭遇した事件に関わることになる。彼は犯罪の専門家でありながら、異邦人という身分であるため地元の警察権力の公式の担い手ではなく、またその協力を十全には得られないという意味で私立探偵である。

ところで、クルチーニンには絵画の才能があり、これがきっかけでグラチークと知り合う。とある保養地でクルチーニンは風景画を描いていた。それをグラチークが目にする。そこは彼にも馴染みの場所だったが、絵画はどこか記憶と異なる。そこで二人が現場を確かめた結果、絵が正しいことが判明する。驚くグラチークに、クルチーニンは「私の目はカメラのように全てを捉えるのです。その上で記録するのです」(192)と語り、強い印象を与える。クルチーニンがホームズを模した人物であり、特殊な才能を有していることは、アダモフの指摘にもあったことだが、それは具体的には、いわゆるカメラ・アイ（瞬間記憶能力）のことを指していたのである。また、クルチーニンは奇妙な捉え難さも備えていた。「誰もが一樣に彼の中に見出したのは、注意深い聞き手だった。だが、彼から十以上の言葉を聞き出すという名誉を手にする事ができたのは一人としていなかった。服装も癖も言葉も、彼の職業や社会的な地位を推し測らせなかった。彼の顔の特徴は一樣に、医者でも会計主任のようでもあり、どんな職業の人でも、俳優を除くならどんな芸術家のようでもあった」(187)。こうしたことに感銘を受けたグラチークは、次第にクルチーニンを崇拜するようになり、彼の旅に同行する決断をする。

その二人の、犯罪を解決しながら進む旅の最初の作品である「大晦日」は、彼らが「到着したのは、ソ連軍がヒトラーの篡奪者から解放した街だった」という一節で始まる。異邦人である彼らがなぜ刑事事件の捜査に加わることができたのか。その理由は、次のように読者に説明されている。

²³ Шпанов Н.Н. Ученик чародея. М., 2013. С. 238.

クルチニンとグラチークがここに来たのは、この物語で語られている出来事とは何の関係もない目的のことだった。しかし、最近まで社会民主党の職員で地元紙の編集者だった当地の警察署長が翌日、彼らのもとを訪れるには、チェックインのために二人がホテルで受付にパスポートを見せるだけで十分だった。新しい民主的行政機関の責任者の一人として、解放してくれた偉大なる国民の代表者を個人的に表敬しておく義務があると考えたに違いない。犯罪問題に関するクルチニンの仕事は、祖国のみならず外国でもかなり有名で、現在の警察署長が元新聞記者でなかったとしても、お忍び状態であるのは無駄なことだったのだ。(182)

2. 「大晦日」

クルチニンらが辿り着いた街では、戦後すぐということで、ドイツ軍が残していった爆発物の除去が終わっておらず、特に発電所に仕掛けられているという起爆装置が問題とされていた。その爆発物には、隠されている位置を記した地図が存在し、その地図は発電所の責任者であるヴェリマン博士が所長室の金庫に保管しているとの噂だった。

大晦日の夜、発電所で殺人事件が発生する。発見したのは、パトロール中のクルーシという警部補で、年明け間近で本来なら職員らがすでに帰宅しているはずの発電所の窓に明かりがついていることを不審に思い、確認に向かったところ、所長室で銃声が鳴り響くのを耳にしたのだ。見つかったのは、ブラドゥウという所長の秘書の遺体だった。これが発端となり、捜査の協力要請が地元警察からクルチニンに寄せられることとなる。

現場検証で明らかとなったのは、所長室の金庫から爆発物の地図が盗まれていること、秘書のポケットにヴェリマン邸でのパーティの招待券があったことから、彼が地図を持ってそこへ向かうつもりだったであろうこと、しかし何者かによりそれを阻まれたということだった。地図は犯人が持っているか、開いた窓から秘書が誰かに渡したかの二つで、地図が落ちたであろう場所を調べてみると、案の定、登山靴の足跡が発見され、それを辿ってみたところヴェリマン邸に行き着いた。グラチークは、「彼は自分で自分から地図を盗んだということなのですか」(219)と当惑する。地元警察が所長宅の捜索令状を取り、調べに入ろうとしたところ、悲鳴が聞こえ、今度はヴェリマン自身が部屋で殺されているのが見つかる。建物の中にいたのは、所長の妻、私設秘書のエラ・クローン、その恋人でヴェリマンの甥の三人だった。

エラの話によれば、大晦日の夜、何かを不安げに待つ様子だったヴェリマンは、突然、散歩に行くと言って出かけ、帰宅後は自室に引き上げた。出かけたのは地図の受け取りのためだったようだ。エラが様子を窺いに行くと、彼女は「牛乳」を頼まれる。朝と就寝前にそれを飲むのが所長の習慣だったのだ。そして、一連のその様子を、廊下の端から妻が見ていた。エラはその様子について、「奥様が私に投げかけた視線は、私とヴェリマン博士

の関係を確信しておられることをはっきりと告げるものでした」(228)と語り、さらに重要な供述をする。

私はヴェリマン所長の傍にいたのが自分の務めだと思いました、声色から察するに、嫉妬で完全に我を忘れた奥様は、自宅にお客様がいらしているのも構わず、すぐにでも私を追い出さないうなら、妄想されている私たちの関係を無理やりにでも断ち切ると脅されていたのです。「無理やりに」という言葉で何をお考えだったかは分かりませんが、その声はとても脅迫的でした。(230)

こうして皆の疑いがヴェリマンの妻に向かう中、クルチーニンはただ、エラに「牛乳」を入れた時間を問うのみだった。「牛乳の入ったコップを持って台所を出るときに、壁かけ時計に目をやりました。2時15分前でした、いまが、2時35分ですから」というエラの答えを聞いた彼は、「つまり、あなたはちょうど50分前にこの牛乳を注いだわけですね」(233)とだけ言って、邸を後にする。結局、爆発物の地図はここでも見つからなかった。

これに続いて、第三の事件が発生する。今度はヴェリマンの甥がホテルで殺されているのが見つかるのだ。そしてその傍らには、「ベッドの枕もとの椅子に縛られたエラ・クローン」が「目隠しと猿轡」(240)をされた状態で横たわっていた。彼女の話では、恋人の部屋に入ると、何者かに襲われ、拘束されてしまい、後から入ってきたヴェリマンの甥は、その何者かに殺されたということだった。それを聞いたクルチーニンは、「タオルで彼女をより一層、きつく椅子に縛り付ける」(241)という奇妙な行動を取ってから、ホテルから逃げようとする警官を追いかけ捕まえる。すでに、彼には謎が解けていたのだ。

真相はこういうことだった。所長はナチスの元協力者だったが、発電所の爆発物の地図を新政権に渡すことで、保身を図ろうとしたのである。しかし、公然とそれを行うことは、第五列、つまり国内で敵の味方をする組織から復讐される危険性があった。しかもその頂点にいたのが、警部補のクルーシだったのだ。そこでヴェリマンは、大晦日の夜に、秘書のブラドゥに地図を抜き取らせ、彼を介して秘密裏に新政権側に渡す計画を立てた。所長は、そのことをもう一人の秘書エラにも伝えたのだが、実は彼女はクルーシ警部補の仲間だった。エラからそれを聞いたクルーシは、ブラドゥから地図を奪う計画を立てる。「第五列には、発電所の破壊という目論見を実現させるために地図が必要だからだ」(244)。しかし、所長は、ブラドゥに窓から地図を投げてもらい、自分が受け取るという風に、計画を急遽変更していた。かくして、クルーシはブラドゥを殺害するも、地図は入手できず、いまやそれはヴェリマンの手にある。そして今度は、エラが所長を殺害し、地図を奪おうとするのだが、彼の甥がたまたま地図を見つけてしまい、興味を惹かれホテルに持ち帰ってしまう。それを知ったエラは、彼との面会を取り付け、そこでクルーシにこの甥を殺害させ、自分を被害者に偽装したのである。地図の所有者が次々と殺されたわけだ。

クルチーニンが謎をどのように解いたのか。彼が疑いの目を向けるきっかけとなったのは、牛乳を入れた時間についてのエラの証言だった。というのも、「彼女の話だと、僕らが話し始める 50 分前に牛乳を入れたらしい。でも、一時間足らずで牛乳にあんなに分厚い膜ができるかい。そんなの見たことがない。つまり、あれは朝からあったものなんだ」(247)。しかしながら、この謎を解くための「牛乳の膜」という手掛かりは、実は読者には事前に与えられていない。また、ヴェリマンの甥が殺害された際も、クルチーニンはなぜか「彼が襲われた後」(248)に彼女が縛られたことを確信している。これについても、エラが拘束されていたバスローブの腰ひもが、甥を襲って奪ったものだったことが後付けで読者に知らされるのである。

エラリー・クイーンなどが多用する「読者への挑戦」(物語を問題篇と解決篇とに分け、犯人特定のための手掛かりがすでに過不足なく与えられたことを告げ、読者に推理を促す)を例に言えば、これは、作者が解決篇で恣意的に新たな手掛かりを与えているようなものだ。そのため、読者はどれだけ考えても正解できない。しかも、同様の欠陥は以下に見る作品にも共通している。この意味で、推理作家としてのシパーノフには、私立探偵を先駆的に描こうとした意義は認められるものの、技術面での疑問が残る。ただ、我々の関心は技術面ではなく、彼の先駆性にある。この問題を考えるため、ここからは、各作品のストーリーは概略的に確認するに留め、探偵と犯人とがどのような関係に置かれているかを見ていくことにしよう。

3. 「オレ・アンセン事件」

クルチーニン・シリーズの二作目である「オレ・アンセン事件」は、「クルチーニンとグラチークは、その険しい山並みがヨーロッパ大陸最北の半島の一つを隔てている山越えの旅を終えようとしていた」という一節で始まる。これに続いて、「軍事作戦は終わり、この国はナチから解放され、ソ連軍は自分たちの部隊を引き上げさせた。ソ連の人々に対する住民の誠実な友好的態度にも関わらず、隅に隠れたヒトラー主義者や、貴族階級を密かに擁護していたクヴィスリング政権〔第二次大戦時のノルウェーの新独政権〕の最後の信奉者によって、どんな予想外の事態も起こりかねない状態だった」(251)という説明が加わり、前作同様、ここでも彼らがナチス・ドイツのかつての占領地に越境中であることが、読者に伝えられる。タイトルとなっている「オレ・アンセン」とはその案内人の名前である。

二人はエルリッヒという名のナチスの残党を追っていた。その道中に辿り着いた街で、このロシアからの客人の噂を知った住民たちが、彼らの滞在するホテルに訪ねてくる。「このニュースはどういうわけか、すでにこの小さな街の大半が知るところとなっていた。ヒトラーの占領軍からこの国を解放すべく、この地を通過していつて以来、ロシア人がやっ

てくることがなかったためだ」(254)。しかしそれは、クルチャーニンらにとっても好都合なことだった。エルリッヒは離島に潜んでいるらしい、との情報を掴んでいた彼らは、地元の漁師の協力を必要としていたからだ。

そこでクルチャーニンとグラチークは、ヘッケルト兄弟なる人物と知り合いになる。兄は質屋を営んでおり、弟は漁船の船長だった。この質屋の兄には、対独協力の過去があった。そこにさらに、素性の定かでない「牧師」という人物が加わる。

彼らの話によれば、案内人のオレはあまり評判が良くなく、しかもドイツ製のメリケンサックを所持していることが発覚する。このことの何が問題なのか。ドイツ占領時代、この街の住民は質屋に預けていた品物を取り戻しておこうと考えた。しかし、時計や宝石はナチスによってすでに差し押さえられていることが分かる。人々が力づくで取り返そうとしたところ、「ドイツ人に買収された若者たちが現れたのです。メリケンサックなるものが何なのか、土地の人間はそのとき初めて知らされることになったのです」(260)と牧師が語る。しかし、敗走するナチスにはこれらの財宝を持ち去るだけの余裕がなく、この国のどこかに隠していったと噂されていた。

離島探索の翌朝、質屋がクルチャーニンらの元に飛び込んでくる。弟が船内で殺されたというのだ。事件前に船内にいたのは彼ら二人の兄弟だった。そこを牧師が訪ねる。兄はその彼と一緒に船を離れるが、忘れ物をしたと言う牧師が取りに戻ったところ、船長が殺されているのを発見する。クルチャーニンらが遺体を調べたところ、死因は金属による頭部への打撲だった。さらに、床にはメリケンサックが落ちていた。「二日前にオレ・アンセンが手にしているところを目撃されたあのメリケンサック、少なくともそれと瓜二つの」

(273)。しかも牧師によれば、船長とオレは口論していた。「何やら隠された資産や宝についての話でした。それを売るとか売らないとか。誰にだとか。何のことかはよく分かりませんでした。憚られたので、そこから離れて聞くのを止めました。こんなことになるなんて誰が思います」(275)。そして彼は、船の「円形の窓」からオレが「船着き場を駆け抜けて最初の建物の裏に隠れる」(276)のを目撃したと証言するのだった。

現場検証から、船長はテーブル越しに殴られたことが判明する。それは犯人が長身であることを意味していた。メリケンサックに残っていた指紋から、オレへの容疑は早々に晴れた。他に長身だったのは質屋と牧師だった。しかしこの時点で、クルチャーニンの疑いは牧師に向いていた。というのも、彼の証言には矛盾があったのだ。その矛盾は、「船の円形の窓」からは船着き場は見えないという事実由来のものだった。

この倉庫は船着き場を遮る形になっており、どんなに望んでも円形の窓からはそこで何が起きているかは見れませんでした。さらに言えば、円形の窓にはカーテンが降りていたのです。そのため、「牧師」にはそれ越しに何が見えるかは分からなかったでしょう。そのとき私は「牧師」

に「遺体に触れましたか」と尋ねました。彼は「いいえ」と答えました。ところが、カーテンは船長の体で押さえつけられていたのです。つまり、それが降りていたのは犯行の前からであって、後からではないのです。(312)

真相はこういうことだった。質屋はナチスの隠した財宝の隠し場所を知っており、彼らの残党の存在に怯えていた。そして、そのことを弟である船長に相談した。船長は、新政権に秘密を打ち明けるよう忠告し、さもなければ自分が報告すると告げた。そのために彼は殺されてしまったのである。真犯人は実は「牧師」で、彼こそが、クルチーニンらが当初、追っていたエルリッヒだったのだ。「彼は一度として牧師などではありませんでした、彼は、ファシストです」(311)。

以上の二作品には、共通する明白な特徴がある。いずれも、ナチス・ドイツの旧占領地で事件が起きており、その残存勢力という潜在的な容疑者が用意されやすくなっているということである。だが、次に見る「クルチーニンの個人的幸福」は、意外なことにモスクワで起きた事件についての物語なのだ。

4. 「クルチーニンの個人的幸福」

ワジム・ゴルジェーエフという技師の母親が、助けを求めてクルチーニンの元へやってくる。息子が、勤務している研究所での器物破損と窃盗未遂の容疑をかけられ、逮捕されたという。研究所の金庫が破られ、その侵入経路の計画性などから、内部の関係者の関与が疑われた。金庫の中には学術的な資料しかなく、犯人もそれには興味を示さなかったのか、実際には何も盗まれていなかった。しかし、「ソ連の法律で禁じられているような行いは、何であれ出来る筈がないと信じる彼女は、逮捕が間違いであると確信していた」(328)。

ワジムは事件への関与を否定するも、犯行当夜の行動については黙秘した。幾つかの不可解な点があった。彼が実行犯だったのなら、なぜ金銭の入っていない金庫を開けたのか。単なる内通者だったのなら、長年勤務していながら、なぜ間違った金庫を実行犯に教えたのか。なぜ黙秘を続け、アリバイを示さないのか。

黙秘に関しては事情があった。彼には婚約者がいたのだが、別にファンシェッタという名の愛人がいたのだ。クルチーニンらは、恐らく彼は事件の夜この愛人のところにいたのだらうと考え、彼女に話を聞きに行く。「ワジムが自由になるためには、研究所で窃盗があった夜、彼がこのあなたの家にいたと言さえすれば十分なようです」(336)と言われるも、彼女は「そのような嘘で彼を救えるとお考えなのなら、私は話す心積もりです」

(337)と答える。つまり、ファンシェッタの話によれば、彼はあの夜ここにはいなかったのだ。この家でクルチーニンは、「ピアノの上にかなり着古した紳士物の明るい黄色の手

袋」があることに目を止め、彼女からそれがワジムの物であることを告げられる。

数日後、クルチャーニンの元にゴルジュエフ事件の担当者から電話がかかってくる。研究所にまた泥棒が入ったのだという。しかも手口が前回と同様で、同一犯の可能性が高かった。しかし、残されていた指紋を調べてみると、その人物は路面電車で轢かれずで死亡していたことが判明する。轢死体を調べたところ、彼は事故で指を二本、失っていた。つまり、誰かがそれを持ち去り、捜査を攪乱させるために研究所に偽の指紋を残していったのである。

このころようやく、ワジムが事件の夜、愛人の家にいたことを認める。しかし、愛人の方はそれを否定する。黄色い手袋についても、二人の言い分は食い違っていた。彼はそれが自分のものではないと証言したのだ。そこでクルチャーニンが再度、彼女の家を調べたところ、ピアノに残されていた、ワジムのものとは異なる、半月型の傷のある指紋を発見する。こうして第三者の存在が浮かび上がる。ファンシェッタには、さらに別の愛人がいたのだ。クルチャーニンがこのことに気付けたのには、彼女がワジムのものと言った手袋が関係していた。

黄色い手袋から始めなければならない。クルチャーニンがファンシェッタの事件への関与を疑ったのも、まさにそれが最初のきっかけだった。[...] ワジムとの関係を把握していたクルチャーニンは、ピアノの上の紳士物の手袋が、理論上ワジムのものであると考えたが、手で合わせてみると自分には大きすぎる、と間違いに気付いた。ワジムの手はもっと小さかったのである。ワジム自身も、そんな手袋をもっていないと言っていた。ところがファンシェッタは、彼が忘れていったと当初、話していたのである。(371)

事件の真相は、次のようなものだった。

最後に少なからず重要だった状況について。犯人は金を必要としていなかった。大体にして、金庫の中身は何も持ち去られていなかったのだ。犯人にとっては、関心のある資料の写真を撮るだけで十分だった。彼は窃盗犯のような刑事犯ではなかった。外国のスパイで、研究所の機密とされている物理部門に特別な関心を寄せていたのだ。(373)

この真相は、前の二作とは幾分異なっている。今度は外国のスパイのほうがモスクワに越境してくるのだ。しかし、次のように考えれば、本作もこれまでの流れをそれほど逸脱するものではない。ここまで見てきたシパーノフ作品に共通する設定を確認しておこう。それは、クルチャーニンが異郷を巡り、そこで外国人の犯罪者と出会うということだった。一方、「クルチャーニンの個人的幸福」では、彼自身はモスクワにいる。しかし、外国からス

パイがやって来るというのであれば、方向が反対とはいえ、それは異邦の犯罪者との出会いを迎えるという点では共通するのだ。

非常に単純なようであるが、恐らくこれが「ソ連のホームズ」を可能にした条件の一つである。特殊な才能と優れた知性を併せ持つクルチーニンに、「越境する探偵」という役割を負わせることは、彼が異邦人という身分を担い、地元の公権力に協力しつつも、そこには所属しない天才型の私立探偵となることを可能にした。また、クルチーニンの越境は、犯人となる可能性のある人物を、彼にとっての異邦人に限定させ、ソ連市民を悪者にすることを免れさせている。これらはいずれも、作者シパーノフが直面していた先述の課題、すなわち「私立探偵が成り立つ基盤」の非現実性と、「社会の暗黒面を描き出す」ことに対する風当たりを克服するものとなっている。

クルチーニン・シリーズでは、「社会の暗黒面」がいわば外部の他者に投影されているわけだが、では彼らを打ち負かしていくクルチーニンらの活動を徹底して継続した場合の帰結はどうなるのか。それを予感させるのが、「クルチーニンの個人的幸福」における次の一節である。

私たちが生きている間に、人間が悪徳を忘却し、罪を知ることがなくなる日が、最も完成された社会体制だけが示せるような幸福に浸った人間が、いかなる貧窮も感じなくなり、かつて「違法」という言葉で考えられていたようなことを了解するのを止める日が来るでしょうか。[...] 社会の純度は、[...] 悪との戦いにおける我々の知性と能力に大幅に依存しているのです。[...] 犯罪を持ち込む存在を社会から排除することで、私たちはその有機体を健全にし、犯罪汚染の土壌を根絶するのです。(377-378)

ここで言われている「最も完成された社会体制」の実現や「犯罪を持ち込む存在を社会から排除する」ことができたとき、クルチーニンは最終的な勝利を収める。その具体的な在り方を、シパーノフは『魔法使いの弟子』において、クルチーニンの引退として描いている。²⁴

5. 『魔法使いの弟子』

ラトヴィアの首都リガからモスクワに到着した飛行機にヴァンダ・トヴァルドフスカヤという女性が乗っていた。彼女は殺鼠剤である硫酸タリウムの中毒症状を起こしていた。持参していたサンドイッチとお茶に毒を盛られていたのだ。幸い、飲み物を隣席の乗客と分け合っていたため、致死量には至らなかった。

²⁴ Шипанов. Ученик чародея. この作品からの引用はカッコ内に頁数を示す。

これが物語の冒頭である。ここから示唆されているように、やはりこの作品の犯人も異邦人である。「ラトヴィアの大富農で、元アイズサルギ [民族主義的ファシスト組織]、人殺しで放火魔、元ナチス親衛隊員、ナチスのサラスピルス強制収容所の刑吏、「強制移住者 [第二次大戦時にドイツ占領地区からドイツへ強制移住させられた人々]」のための第217収容所の扇動者でありスパイであるアルヴィド・クヴェブ」(231) という非道な人物が犯人である。

彼は様々な悪事を働くのだが、物語の展開の中心となるのは、先の毒殺未遂とクルミヌイシという人物の殺害計画である。クルミヌイシはなぜ殺されねばならなかったのか。それには彼の裏切りという理由があった。

数か月前に、エジン・クルミヌイシとカルリス・シルスという二名の「強制移住者」の破壊工作員が、スパイ破壊活動を遂行するため軍機「第三国」によりソ連に降下した。しかしながら、その任務を果たす代わりに、彼らは二人ともソ連官憲に投降してしまった。最初の尋問で彼らは、「愛国的」移民組織について知っていることをすべて語った。彼らが語ったのは、「強制移住者」用の収容所での数年間の粗末な配給のこと、大金をちらつかされ北アフリカへと働きに行くよう籠絡されたこと、アルジェリアで自分たちが見つけたのは、大金ではなく灼熱の太陽、隙間なく置かれた板寝床、そして日の出から日の入りまで続く奴隷のような労働だった。(26)

もう一つの事件、ヴァンダが殺されかけたのには、彼女の母親とクヴェブとの因縁が関係していた。実は、クヴェブは彼女の夫で、ヒトラーがラトヴィアに侵攻してきたころにはすでに別れていたのだが、再び妻の前に姿を現したのだ。それをヴァンダは目撃してしまう。母と違って、娘の方は戦前にレニングラードに送られ、そこで5年間を過ごしていた。「それがいまとなって、母と娘の世界観の違いとして現れ」(379) する。ヴァンダはこのいかがわしい人物を家に入れるなら当局に話すと母に告げ、それを母はクヴェブに伝えた。

母親は最終的にヴァンダをリガから送り出したのです。明らかになったように、戦争中に彼女を育てたレニングラードの旧友のところへ。やり取りは電報でしました。ヴァンダには飛行機の手ケットが与えられました。[...] 母親は道中の食事を用意します。魔法瓶のお茶も用意します。[...] クヴェブにとっては、硫酸タリウムをハムサンドとお茶に入れておくことは何の困難もありませんでした。娘を殺すためには十分な量です。(382)

このように、犯罪者を外部に求めるという点では、『魔法使いの弟子』もこれまでのシリーズと共通している。しかし、この長編小説が特徴的なのは、捜査を主に担当するのが、クルチーニンではなく、その弟子グラチークであるということだ。実に、袋一平もこの小説

の印象について「舞台をラトヴィアにとり、ドイツの捕虜から故国へ帰ってきたクルミヌイシという青年が殺される。グラチークという探偵が犯行を追って、それが『西』につながることをつきとめ、ほとんどひとりで犯人をつかまえる」と語っている。²⁵

毒殺未遂事件のことを知り、グラチークは一人でラトヴィアへと向かう。「ところで、ニール・クルチーニンがここへとやってくるだろうなどという考えを、彼はどこから思いついたのだろう。グラチークが困難から抜け出る手助けをするには、南方での休暇と療養を投げうつことが不可欠になるというのに」(113)。もちろん、クルチーニンが一切出てこないというわけではない。しかし、彼が行うのは専ら助言を与えることである。

あたかもそれが自分に任されたものであるかのように、久しく前からクルチーニンがクルミヌイシ事件を受け入れるようになっていたことは言っておかねばならない。スレン・グラチヤン〔グラチーク〕が、彼自身、つまりニール・クルチーニンがしたであろうように事件を解決できるようにすることは、友人としての義務だけでなく自分の市民的良心でもあったのだ。(343)

このように、彼は自分ではなく、グラチークが犯罪を解決することに主眼を置いているのだ。しかも、その役割に関しても彼は些か遠慮げみである。「私ですか。私は君の年若い相談相手に過ぎません。しかも頻繁に間違える相談相手だ、だからどうか私のことは気にしないでください」(411)。そして物語の終盤、事件解決後のクルチーニンはこのように言う。「今日で私の休暇が始まるのです。あるいは私にはその権利がないとでも」と。「せめて行先だけでも」との懇願にも、彼は「秘密にさせてください。私のささやかな秘密に」(491)と答える。

では、グラチークはどうなったのか。成熟した彼もクルチーニンと同じように、還暦を迎えるまで各地を放浪し、規範の外にいる犯罪者を探し続けるのだろうか。物語の終わりは、この問いにどちらともとれるように書かれている。というのも、グラチークはクルチーニンとともにどこともなく立ち去ってしまうのだ。ここでは、二人していなくなってしまうことの積極的な意義についてのみ考えたい(勝利者である彼らが、撤退したのだという判断は納得し難い)。

クルチーニンは越境することで、異邦の犯罪者たちを打ち倒したのだった。たとえ彼らが更なる異世界を目指したとしても、各作品で示されたように、この二人の私立探偵が追いかけて捕まえてしまうだろう。もはや犯罪者たちにはどこへも向かう場所はない。この意味で、クルチーニンの引退とグラチークがそれに付いていくことは、社会の平和が完

²⁵ 袋一平「ソ連の探偵小説界近況」155頁。

成したことの象徴として捉えることができるのではないか。作者シパーノフはそのことを、次のように幻想的に描いている。去ろうとするクルチーニンの列車が走り出す。立ち尽していたグラチークは思わず列車へと走り出す。駆け寄ってきた彼に、クルチーニンも手を差し伸べる。「若い友人に別れの握手をしたかったのか、あるいは車両に駆け込む助けをしたかったのだろうか。周囲の誰にもそれは分からなかった」(494)。二人の行先は分からない。彼らはどこへ向かったのかという問いは、彼らはどこにでもいるかもしれないという疑念の余地を残す。クルチーニンとグラチークが遍在するということは、犯罪者たちには向かう場所がないということの、二人の探偵側から見た表現である。

Examination of N. Shpanov and His Traveling Detective: Focusing on the Portrayal of Private Detectives in the Soviet Literature

SAKANAKA Norio

In contrast to the literature of other countries, private detectives such as Sherlock Holmes were not common in the Soviet literature. Probably, one of the first private detectives who is a Soviet citizen and gained a certain degree of recognition is Kruchinin, in the works of N. Shpanov (1896-1961). In addition, he is accompanied by an assistant named Grachik, a sort of Watson figure. However, Kruchinin first appeared only in 1945, which is very late compared to the appearance of similar characters in the literature of other countries.

The reason for the rarity of detective characters in the Soviet literature is explained by the unique nature of their work. Restoring private property can be interpreted as cooperating with the enemies of the working class. From the perspective of the infallibility of the Soviet judiciary and administration, an individual who outwits the court and police and finds the culprit of a crime is not acceptable. Moreover, in the Soviet society, it is inherently difficult to portray the world of crime, since there are no dark spots or the like. These economic, political, and social institutions are the reason for the difficulty in characterizing Soviet citizens as private investigators.

Under these circumstances, Shpanov wrote a series of works featuring Kruchinin. Based on the plots of popular police novels in the 1950s (including the resolution of cases by steady, collective investigation), the stories centering Kruchinin were criticized by some literary critics in Soviet Union. In other words, Shpanov was forced to make a story about this private detective in a difficult situation.

Therefore, what kind of ingenuity made Kruchinin possible? In this perspective, the setting of the “traveling detective” is particularly noteworthy. At the time of creating this series, Shpanov titled it as “The Adventure of Kruchinin”. As implied by the title, this Soviet detective literally travels abroad. Furthermore, when he celebrates his 60th birthday, he weakens his presence. This paper explores why adventure enables the detective to exist and clarifies the logic for his retirement. Thus, we examine Shpanov's understanding of private detectives in the Soviet literature.